

# 明智光秀は 何故謀反を起こしたのか

## 本能寺の変 『四国説』

1. 明智光秀の出生の謎と織田信長との出会いから  
近畿管領になるまで

2. 四国説 長宗我部、斎藤利三問題

長宗我部元親と三好氏の阿波を巡る抗争と明智光秀

令和2年7月3日 10日  
徳島学博士 坪内 強

# 天正10年6月2日明朝 本能寺の乱勃発

- 天正10年6月2日 朝、京都本能寺に滞在していた織田信長を家臣・明智光秀が謀反を起こして襲撃。
- 信長は寝込みを襲われ、包囲されたのを悟ると、寺に火を放ち自害して果てる。
- 信長の嫡男で織田家当主信忠は、宿泊していた妙覚寺から二条御所に退いて戦ったが、やはり館に火を放って自刃。
- 2人の非業の死によって織田政権は崩壊することとなる。

# 長宗我部元親討つべし！ 織田信長 方針転換

- 天正3年(1575)頃、織田信長は長宗我部元親に、**四国内は元親の切り取り次第**という朱印を出す。
- しかし、天正9年の後半頃に、**土佐と阿波半国しか領有を認めない**と通達した。
- 元親は承知せず「**四国はそれがしが切り取った領土**。信長卿に与えられたものではない」と反発。
- 信長は、四国を席捲するばかりの長宗我部勢力の増長に危惧を抱くと共に、長宗我部氏と敵対する三好氏を支援する羽柴秀吉の献策などもあって、天下統一の早期実現のためには**長宗我部氏を討つべし**という方針を固める。

# 織田信長、信孝に四国攻めの指示を下す

- 天正10年（1582年）5月上旬、信長は三男の織田信孝を総大将、丹羽長秀・蜂屋頼隆・津田信澄を副将として四国方面軍を編成し、四国攻めの指示を下す。

◎信長が信孝に与えた朱印状(天正十年五月七日付)

- 信孝を三好康長(咲岩)の養子とする。
- 讃岐国を信孝に、阿波国を三好康長に与える。
- 伊予国・土佐国については信長が淡路に到着してから決める。

◎信孝らの軍は6月2日(3日とも)に四国へ向けて出航する予定であった。

# 長宗我部氏 九死に一生を得る

- 6月2日早朝、信長は明智光秀の謀反により本能寺にて自害。
- 後ろ盾である信長を失った三好康長は勝瑞城を捨てて逃亡。
- **長宗我部氏は存亡の危機を脱し**、一転して阿波・讃岐侵攻の絶好の機会を迎えた。
- 天正10年8月 長宗我部は、一宮城、夷山城を奪回し、中富川の戦いで勝利を収める。
- 十河存保まさやすは阿波の勝瑞城を放棄し、同年9月、讃岐の虎丸城に撤退。
- 阿波国内で長宗我部氏に反抗する者は土佐泊城の森村春のみとなった。
- 天正11年旧織田家家臣の柴田勝家、そして天正12年徳川家康らとも結んで羽柴秀吉に対抗しつつ、阿讃そして天正13年には伊予の覇権をほぼ掌握する。

# もしも、本能寺の乱がなかったら

- 本能寺の変がなければ、日本の歴史はまったく違うものとなっていたはずである。この事件がなければ、日本はどう変わっていたのか。
- また、阿波の国はどうなっていたのだろうか。
- 信孝軍が長宗我部氏を滅ぼし、三好康長の養子となった信孝が、讃岐・阿波の領主となっていた可能性は強い。
- 蜂須賀家政が阿波に入ることもなく、その後の阿波藍や、阿波踊りの隆盛もなかったかもしれない。

# 何故、本能寺の変は起こったのか

- 明智光秀が織田信長誅滅を断行した動機は、いまだに日本史上最大の謎の1つである。
- 謎の解明が困難なのは、**光秀関係の史料の多くが抹殺・改竄**されてしまったためだ。
- それほど「主〈しゅう〉殺しの逆臣」という汚名は重いものであった。
- いったいなぜ、光秀は織田信長を殺したのだろうか。

# 天下の謀反人 明智光秀

- ただの謀反人ではない、光秀像とは
- 多聞院日記  
「光秀は細川兵部太夫の中間だったのを信長に引き立てられた」
- 光源院殿 御代 当参衆 并 足輕 以下 覚書  
足輕衆として明智の名がある  
永禄11年一乗谷で足利義昭の家臣となったと思われる。



- 立入左京亮の「立入左京亮入道隆佐記」（『続群書類従』第二十輯上）で、そこに次のような記述がある。

美濃国住人**ときの随分衆**也。

明智十兵衛尉。

其後、従上様被仰出、

惟任日向守になる。

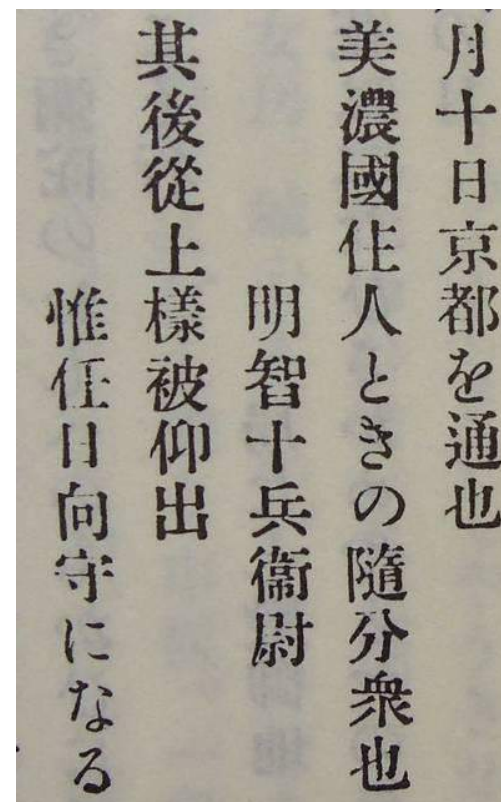
「ときの随分衆」というからには、光秀が美濃守護土岐氏の一族だった可能性は大きいと思われる。

- 土岐明智氏は土岐氏からの分かれで、明智荘に居住して明智氏を名乗り、室町時代には、幕府の奉公衆となっていた。
- 系図類では、光秀はその土岐明智氏の直系として描かれているが、それを**たしかな古文書類で論証することはできない。**

- 「光秀の家は**土岐家の庶流**ではあったろうが、光秀の生まれた当時は**文献に出てくるほどの家ではなかった**」
- 「光秀は秀吉ほど微賤(びせん)ではなかったとしてもとにかく**低い身分から身を起した**」
- 「結局光秀はその**父の名さえはっきりしない**のである。」

(高柳光壽みつとし『明智光秀』)

- 光秀は、美濃守護土岐一族の明智氏とのつながりはなく、名門土岐一族の出身というのはあやしいという説もある。



# 土岐明智氏とは

- **土岐氏**は清和源氏・源光衡みっひらの末裔であり、鎌倉時代に美濃国土岐郡に本拠を構えた。
- 以降、土岐氏は美濃に勢力を拡大し、室町幕府になると頼定が**美濃国**に**守護職**を与えられ、三管四職家（管領になれる家柄）に準じる扱いを受けた。
- 室町時代は**分割相続**が基本だったので、**土岐氏**からいくつもの**一族庶子家**が輩出している。**池田**・**石谷**（いしがい）・**揖斐**（いび）・**多治見**・**明智氏**などである。
- 明智氏はいつ、土岐氏から分かれたのだろうか。
- 明智氏初代または二代目は**明智頼重**とされ、美濃国池田郡で生まれる。
- 観応2年（1351年）従兄にあたる**明智頼兼**の養嗣子となり、土岐明智家の家督と、**可児郡明智**・同郡姫郷・尾張国海東郡宮村の地頭職を相続したとされる。
- または、頼兼と頼重は同一人との説もある。

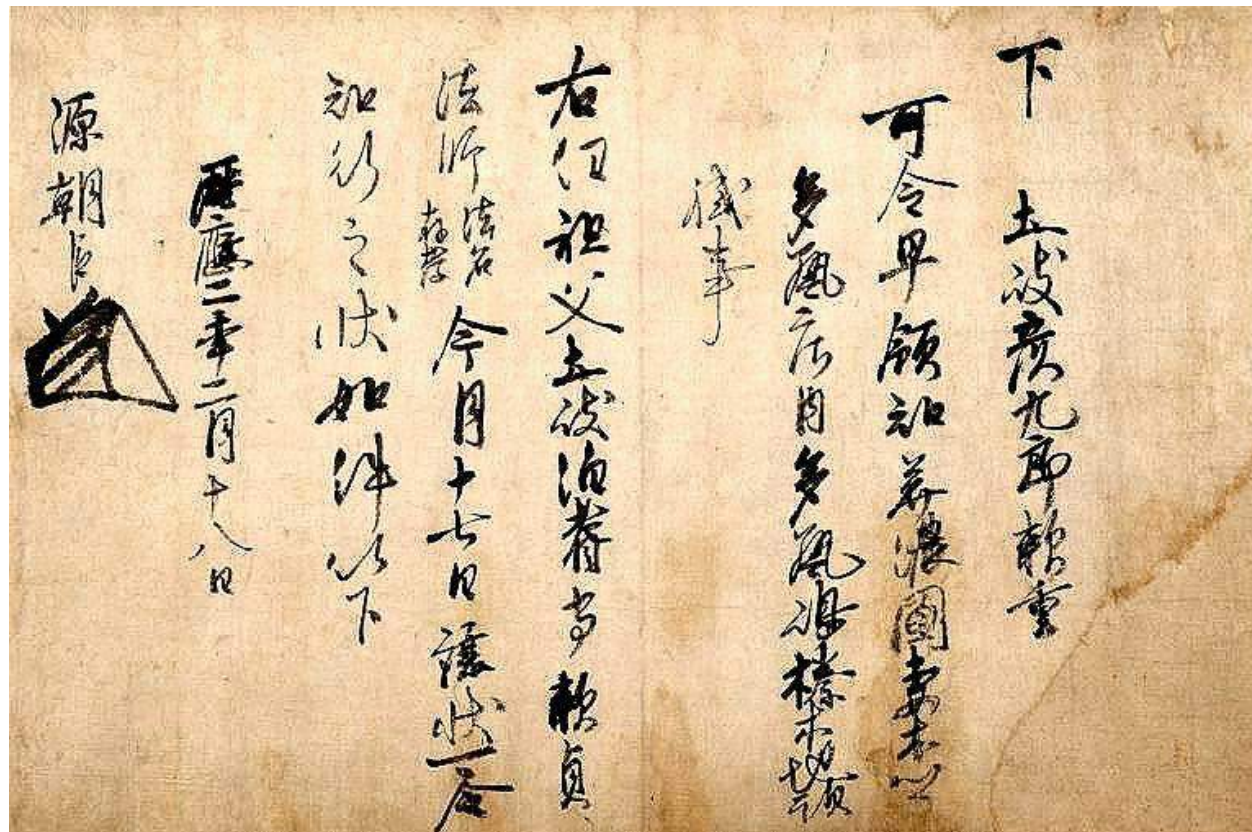


- 暦応2年(1339)2月18日に、美濃守護**土岐頼貞**の所領であった**妻木郷**と多気庄(大垣市・養老町)の一部を、孫の**彦九郎頼重**が相続したことを、室町幕府が認めた文書。

これにより頼重を**土岐明智氏の初代**とする。

(頼貞の孫は頼兼ではなく頼重、相続したのは明智荘ではなくて妻木郷)

- その後、**可児郡明智**・同郡姫郷・尾張国海東郡宮村の地頭職も相続したと思える。



# 最新説

光秀の生地は  
滋賀県犬上郡多賀町佐目だった。

光



見津けんつ一族が明智の「落人」として逼塞しつつ伝説を口伝し続けてきた。

# 明智光秀の一番古い出自の文献

- ごうじもんでんろく **光秀の出生地**は滋賀県犬上郡**多賀町佐目**
  - 『**江侍聞伝録**』 1672 細川家記より100年古く大老**井伊直澄**に献上
  - 佐目之里二明智十左衛門ト云侍濃州ヲ退二三代居ス、息十兵衛光秀越前義景エ弍百石ノ約ニテ越ス道に川流之大黒天ヲ拾ケル、糶至一乗之谷テ諸士二是ヲ語見ケル諸士之日、大黒ハ千人之頭ト云コトニ川流ヲ猶尊信シ利益二叶ト云フ、光秀曰ク吾千人之大将ヲシ非本望トテ捨ケルト云、果テ万士之大将ト成暫モ天下ヲ知事、生付テヨリ度盛広事如斯、元江州生国故山崎表合戦節当国衆多ク与カシテ皆世ニヲチケルト
- 
- 佐目に明智十左衛門が美濃から来て二三代住んでいた。
  - 息子十兵衛が越前義景に二百石の約束で行く途中大黒天を拾った。
  - 大黒天は千人の頭になる利益があると皆が言うが、光秀は千人の大將は自分の本望ではないと捨ててしまった。
  - 光秀は元江州の生まれなので山崎合戦の時多くの国衆が従った。

# 光秀は多賀坊人だったのか？

- 『淡海温故録』（天和4年1684～1688）
- 「佐目 此処ニ明智十左衛門住ス云明智ハ本国美濃ノ者ニテ土岐成頼に続センカ後ニ成頼ニ背テ浪人シ当国ニ至リ六角高頼ヲ頼ミ寄席セケル処屋形日ハ土岐ノ庶流旧家ナリトテ扶養米ヲ与ラレ ニ三代モ此処ニ住スト云息十兵衛ニ至リテ器量優レタル者ニテ越前へ立テ越前朝倉家ニ仕ランコトヲ望ム～云々
- 佐目に明智十左衛門が住んでいたという。
- 美濃明知出身で、土岐成頼公に背いて浪人になって、六角高頼公を頼って近江に来た。 1480年頃
- 尾形(六角高頼)が「明智は土岐一族の旧家なので、扶助米を与えた」。そして2～3代も住んだという。
- 十兵衛は器量が優れていたもので越前へ行き越前朝倉家に仕えることを望んだ。



- 明智光秀が多賀近隣地域の出身だった。と仮定すると、彼のエピソードとして語られる、諸国巡歴、薬学の知識、鉄砲の巧者、諜報の巧者といった逸話に共通の筋書きが考えられる。
- 光秀は**犬上衆** (彦根・犬上・東近江) との絆や「**多賀坊人**」と密接な関係があったのではないか、という推測ができる。
- **多賀坊人**は下級の社僧として諸国を巡り、延命長寿の多賀信仰を広めた集団で伊勢や**熊野の御師**、**高野聖**などと同様の役割を果たした。
- **坊人**の中には甲賀衆らが含まれ、修験道とも結びつき活動したため、**薬学**、**鉄砲**、**諜報**などの知識に通じる者も多く、光秀の謎の前半生が多賀坊人と共にあった可能性を想像させる。
- また、山崎の戦いには、多賀氏・久徳氏・土田氏などの犬上郡内の武士が多く加勢している。

# 歴史以前の明智光秀についての通説

- 美濃の国人。美濃守護土岐氏の一族。
- 美濃を支配していた斎藤氏の内乱の際、叔父明智光安が敗北。
- 居城である明智城を追われ、流浪の身となる。

弘治2年(1556年)28歳

- 諸国遍歴の上、越前の朝倉家に仕官する。
- そして、朝倉家を頼って落ちてきた足利義秋（のちの足利義昭）と、それを支える細川藤孝に協力し、尾張国、美濃国を支配する織田信長を頼るよう提案。織田家との橋渡しをする。
- その後、信長の助力を得て、はれて征夷大將軍となった義昭と、織田信長に両属する形となり、永禄十二年（1569年）四月十四日付賀茂庄中宛ての書状で、歴史の中にその名を刻み始めることとなる。

# 『惟任退治記』 と 「明智軍記」

## 明智光秀像をゆがめた

- 明智光秀謀反の動機が**怨恨や天下取りの野望**だとしたのは**羽柴秀吉**である。
- 本能寺の変のわずか四か月後に家臣に命じて書かせた本能寺の変の顛末記『**惟任退治記**』にそう書き込ませた。
- また、「**明智軍記**」という軍記物がある。歴史家の中では作り話だと理解されている書物だ。成立は元禄年間（1688年～1704年）とみられている。
- 少なくとも、天正10年）に明智光秀が山崎の戦いに敗れ死去してから、**約120年後に成立**した書物である。作者は不明。
- 物語としては面白い。が、書いてあることに間違いが多い。
- 更に、朝倉仕官説の元となる「細川家記」も「明智軍記」を参考に書かれている。

# 惟任退治記とは

- 『惟任退治記』は本能寺の変からわずか数か月ののち、天正10年（1582年）10月に書かれたもので、創作性はあるとはいえ、一連の歴史の流れを知る上では重要な資料といえる。
- 『天正記』という秀吉の活躍を讃える書物のうち的一篇であり、書いたのは、秀吉の御伽衆のひとりであった大村由己である。
- 光秀が謀反を起こした理由は怨恨説として有名。

『惟任奉公儀。揃二萬餘騎之人數。不下備中。而密工謀反。併非當座之存念。年來逆意。所識察也』

- 惟任光秀は二万余騎の兵をそろえて中国攻めに向かうはずだったが、備中へは向かわず、密かに謀反の計画を立てた。
- これは、信長に仕える中で年来積もり積もっていた逆意があり、光秀は今こそ謀反を起こす時だと思い行動に移したのだ。

# 明智軍記とは

- 『**明智軍記**』は**元禄6年**に前編5巻が出され、元禄15年に後編5巻を加えて全10巻となった。全部で65話もあり、**光秀の汚名を濯ぐ**という120年の思いが強く感じられる書物である。
- 120年を経てもなお、明智光秀の主殺しの汚名を濯ぎたいと願う人々が『明智軍記』を成立させたのだろう。
- しかし、間違いが多い。
- 長良川の戦いでも、義龍が父・道三を殺したのではなくて、道三の孫の龍興が父・義龍を殺したことになっている。
- 光秀は義龍に仕えていて、龍興に明智城を攻められる。
- 全て一代ズレている。
- 初っ端から大きな間違いをしているので、余計に信憑性が損なわれている。
- 作者は、わざと間違えたのか?とさえ思ってしまう。

# 司馬遼太郎氏の『国盗り物語』で描いた「明智光秀」と、実在の明智光秀

- 国盗り物語に書かれている「**光秀は明智城の城主の子供であり、明智城が落城した際に逃れて諸国を放浪した**」という話は、「**明智軍記**」に初めて書かれた話である。
- 「明智軍記」は、あくまでも軍記であり、**光秀が明智城に居た**という話の**信憑性は全く無い**と言われている。
- なお、**光秀が歴史の表舞台に登場してくるのは、信長が將軍・足利義昭を奉じて上洛した永禄12年の時**である。
- 同年4月16日付で、「**地元の豪族に横領されていた朝廷御料地を、朝廷の直接管理に戻す**」と発令したことを伝える立入宗継宛の「**光秀他三名連署状**」が残っている。
- **それ以前については闇に包まれている。**

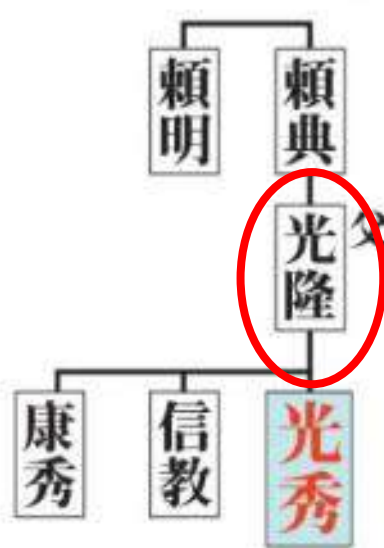
# 光秀は斎藤道三に仕えたのか

- 通説によれば、**光秀**は**斎藤道三**に**仕え**、弘治2年の斎藤道三・義龍父子の長良川合戦の後、明智一族は**明智城**に立て籠ったが、**義龍**の**軍勢**に**攻撃**されて**落城**した。
- 落城直前に光秀と数人が城を脱出し、越前へ逃れたという。
- しかし、光秀が、土岐氏を滅ぼした斎藤道三に仕えることは、ありうるのか。
- しかも、光秀の父、**光綱**は、土岐氏に仕え、1535年 **斎藤道三**に美濃・明智城を攻められて討死している。
- 「**美濃明細記**」には、「弘治元年國中の勢を催しけれども、義龍の勢に加り鷲山へは十が一も参らざりけり。**義龍の味方**に加はる宗徒の輩には、揖斐稻葉守、原紀伊守、船木大學介、石谷近江守、**明智十兵衛**、・・・」
- つまり、光秀は義龍とともに、斎藤道三と戦ったと書かれている。

# 史料によって異なる「光秀の父」の名



「土岐家系図」(「続群書類従」所収)  
によると



「明智系図」(「続群書類従」所収)  
によると



「明智氏一族宮城家相伝系図書」  
によると

- 光秀の父として広く知られている光綱は病弱のために子がなく、進士信周に嫁いだ妹の次男・光秀を養子にしたとされる。
- 光秀は若狭国の刀鍛冶・冬広の次男等の説もある。



# 明智光秀の出生と生年

- 清和源氏の土岐氏支流である明智氏に生まれたとされる。
- 父は江戸時代の諸系図などでは明智光綱、明智光国、明智光隆、明智頼明など諸説がある。
- 生年は信頼性の高い同時代史料からは判明せず、不詳である。
- 『明智軍記』などによる享禄元年（1528年）説。享年55歳
- 『当代記』による永正13年（1516年）説の2説がある。享年67歳  
(当代記の作者は家康の外孫・松平忠明、光秀死後数十年後に書かれた当代記のほうが、史料的价值が高い)
- 最近では、当代記の永正13年生まれとの説が支持されつつある。  
そうならば、乱の時点では67歳と高齢となり、通説を考え直す必要がある。

光秀は子の年の生まれとの伝承(鼠が馬の腹を食い破る)がある。25

- 「美濃国諸旧記」では、美濃国可児郡明智荘明智城（岐阜県可児市）の出身で、父は明智遠江守光綱とされている。
- しかし、光秀の前半生については諸説様々で、確かなことはまったく判明していない。
- おそらく光秀は可児郡明智荘を伝領した土岐明智氏惣領家の人であったかもしれない。
- 「美濃国住人とき（土岐）の随分衆也。明智十兵衛尉、その後、上様（信長）より仰せ出され、惟当日向守になる。名譽の大將也」  
「立入左京亮入道隆佐記」
- 光秀は、美濃国土岐氏の支族・明智氏の系譜を引く名門と考えられてきた。
- しかし、一次資料に父祖の記録が残っておらず、これは明智氏が元来美濃の国人で、かつては相当な身分で土岐氏に仕えた名門であったことを伝えているに過ぎないとも。

- 「**明智一族宮城家相伝系図書**」では  
享祿元年（1528）8月17日、光秀が生まれたのは美濃国石津郡多羅の**進士家**の居城（**多羅城**）或いは**明智城**（明智長山城）で生まれたとされている。
- 伝に拠れば光秀の実母は明智光綱の妹であり、**父は進士山岸勘解由左衛門尉信周**。光秀はその次男であると書かれている。
- 明智光秀の母の**兄・光綱**は病弱で子どもが生まれず、そのため光繼が**孫の光秀を光綱の養子**に引き取って家督を譲ったとある。
- 『明智氏血脈山岸家相伝系図書』では、
- 明智光秀は多羅城主・**山岸信周**の子で、母・市女（光綱の妹）が里帰りして明智屋敷（明智城）にいた時に生まれ、**明智光綱の養子**になったとしている。
- 「続群書類従」本「**明智系図**」では  
明智光秀は享祿元年（1528）**美濃国多羅城**にて、**明智玄蕃光隆**と若狭の**武田義統の妹**との間に生まれたとされている。



# 進士家とは



- **進士家は御旗指役**であり將軍家の軍旗を守る**名誉の家**であった
- 室町時代の進士氏は足利將軍家ゆかりの地に所領を有していて、將軍の食膳の調理を進士氏が世襲している。(進士流)
- 明智・進士両家は代々重縁となってきたが、進士は元来、氏ではあらず、官名によるものであって、もとは山岸と称した。
- 『日本史』に記載の「公方様の政庁の最高の貴人たち」の一人、「**美作殿**」という人物は**進士美作守晴舎**を指している。

## 「明智光秀公家譜古文書」

- **進士信周**（のぶちか）**、妻は明智玄蕃光隆の姉**なり。信周子多々あり。
- **嫡子** 進士美作守**晴舎**と云（ふ）。未だ部屋住にて將軍家に直勤す。
- **次男** 山岸勘解由**信舎**と云（ふ）。
- **三男** 進士九郎（三郎）**賢光**と云えり。
- **四男** のち **明智光秀也**（後で明智に改名した）

## 進士賢光、三好長慶を襲い失敗して自害

- 天文20年（1551年）、将軍足利義輝は伊勢貞孝邸で三好長慶が酒宴を行うとの情報を得て、その場で長慶を暗殺しようと奉公衆の進士賢光を伊勢邸に派遣した。
- 賢光は酒宴中に長慶に抜刀して向かったが軽傷を負わせたのみで暗殺には失敗してしまい、その場で自害して果てた。

## 進士晴舎、永禄の変で、敵の侵入を許し 御前で切腹

- 永禄8年（1565年）三好・松永勢は清水寺参詣を名目に約1万の軍勢を結集して御所に押し寄せ、将軍に訴訟ありと偽って取次ぎを求めた。
- 進士晴舎が訴状の取次ぎに往復する間、三好・松永の鉄砲衆は四方の門から侵入して攻撃を開始した。
- 将軍方は激しく応戦し、その間に殿中では、進士晴舎が敵の侵入を許したことを詫びて御前で切腹した。

# 光秀は、進士晴舎の弟(息子?)の進士藤延か

- 永禄の変以降、進士氏は勢力を弱体化していく。
- 晴舎の娘・小侍従は将軍義輝の愛妾であり、将軍との間に子供(女子)をもうけており、晴舎は将軍の外戚ということになる。
- 小侍従は、殊に将軍の寵愛が深かった。
- しかし、進士晴舎は永禄の変の当日、御所で自害、小侍従も殺された。その後、進士一族がどういう顛末を辿ったのか・・・
- 少なくとも歴史の表舞台からは姿を消しているが?
- 弟(息子?)の進士藤延は生き延びて、後に信長の命により明智光秀と改名した?との説もある。(小林正信)
- しかし、京都で典礼などで名高い進士家と明智家が姻戚関係が絡んでいて、一族であるかのように家系を改竄したのではないかとも言われている。

# 明智改名説(小林正信)

THE YOMIURI SHIMBUN

## 読賣新聞

2017年(平成29年)  
1月15日(日)曜日

### 東海百城

### 明智へ改姓 信長の戦略

**美濃人の変**  
美濃守 土岐氏  
先秀が明智に改姓した  
美濃守 土岐氏  
先秀が明智に改姓した  
美濃守 土岐氏  
先秀が明智に改姓した

**尾張断り切った指原**  
尾張断り切った指原  
尾張断り切った指原  
尾張断り切った指原

**妻木城**  
妻木城  
妻木城  
妻木城

**明智へ改姓 信長の戦略**  
明智へ改姓 信長の戦略  
明智へ改姓 信長の戦略  
明智へ改姓 信長の戦略

- **明智光秀**は、室町幕府の奉公衆の**進士源十郎藤延**である。その父は、進士美作守晴舎である。
- 永禄の変で藤延は、妹の小侍従と共に生き延びる。
- 藤延の母の家は土岐明智氏出身で、領地の妻木氏を名乗っていた。
- **明智氏**は**内紛**で**妻木氏**と**菅沼氏**に分かれ、「**明智姓**」は**空白**となっていた。
- **信長**は、**美濃**を支配するために、空白の「**明智**」の性を利用し、**進士藤延**を**明智光秀**に改名させた。
- 光秀は、室町幕府の「奉公衆」の出身者であったからこそ、織田政権においても重きをなした。



# 光秀の正室・熙子は土岐明智氏

- 土岐明智氏は、南北朝時代に彦九郎頼重が祖父土岐頼貞から土岐郡妻木郷（現土岐市妻木町）などを相続し、初代を名乗った。
- 明智氏の本拠地は妻木郷であったが、本拠地を京都に移して幕府奉公衆となったので、妻木郷は、在郷分家が治めた。
- 妻木氏初代（在郷明智氏5代）善左衛門頼安が在京宗家明智玄宣から領地の半分の妻木郷を奪い妻木氏を興した。
- （玄宣の曾孫が光秀で頼安の曾孫が熙子か？玄宣は連歌界では超有名）
- 宗家明智7代政宣が消息不明になると、妻木郷の分家が本家になった。
- 妻木氏は間違いなく土岐氏族であり、土岐郡妻木郷に因る明智一族の主流である。光秀は在京明智氏の庶流で、領地に派遣された一族。
- 熙子の父は、妻木広忠 または弟の妻木勘解由左衛門範熙とされ、『兼見卿記』でも妻木氏と見える。

- 熙子は西教寺に残されている『過去帳』では1530年生まれで、15歳で20歳後半の光秀に嫁いだとされる。
- 西教寺の記録には同年11月7日に46歳で亡くなったとあり、同寺には墓石も存在する。
- 明智光秀の正室の名は熙子と伝えられているが、この名前は正確に伝えられてきた名前ではない。
- 故三浦綾子が書いた『細川ガラシャ夫人』という1975年に発表された小説以来、熙子という名で周知されていったようだ。
- それ以前は「お牧の方」または「伏屋姫」と呼ばれていたようだが、これらに関しても正確な名であるという資料は無い。
- ただ解っているのは、妻木範熙のりひろの娘らしいということだけで、三浦綾子はこの父親の名から熙子と設定されたようだ。
- 司馬遼太郎『国盗り物語』では「お槓」とされている。

# 幼馴染みだった明智光秀と熙子

- 光秀が生まれた当時の明智家は、在京明智氏の庶流で領地の美濃に派遣された小土豪に過ぎなかった。
- 光秀自身も明智家の居館で生まれず、進士家の居城だった美濃の多羅城で生まれた。（後に明智家の養子となった）
- そして幼少期は妻木家の庇護を受けながら成長した。
- 幼少期の彦太郎（明智光秀）は周囲からの評価は非常に高く、斎藤道三をして「万人の将となる人相」をしていたと言う。
- 自然な流れとして、元服した明智十兵衛光秀は幼馴染みでもあった妻木範熙の娘、熙子を娶った。
- 弘治2年（1556年）に斎藤義龍によって明智城を落とされ越前に落ちた際、熙子は身籠っていたというから、二人の婚姻は少なくともそれ以前ということになる。

# 黒髪を売って光秀を支えたと伝えられる熙子

- 光秀が越前に住んでいた頃、光秀は歌会を催すための資金繰りに悩んでいた。
- その際に熙子が黒髪を売ってお金の工面をしたという。
- また、坂本で病気になった光秀を看病し、看病疲れで天正4年に病死したと『西教寺塔頭実成坊過去帳』に記されている。
- 一方『川角太閤記』では本能寺の変後、明智秀満が光秀の妻子を介錯した後に自刃とも書かれており、情報が一致しない。
- 光秀にも側室や後妻がいたとも言われるが、熙子が存命中は側室は持たなかったという説が広く伝えられている。
- この言い伝えからすると、秀満が介錯した光秀の妻は後妻という可能性もある。

# 熙子は継室？

- 明智光綱の弟である山岸光信（進士光信）の娘・千草。明智光秀は、この千草に子を産ませたとする説がある。
- 1546年、明智光秀が18歳のときに、千草16歳と結婚して最初の妻にしたが、のち死別した。
- 子の光重は、母方の山岸家の養子となり、のち明智家の家臣に加わり、明智光重と称したとされる。
- 妻木熙子は継室として1553年ころ25歳?の光秀に嫁いだと言う。
- 明智家、妻木家は土岐氏の一族であり、幕臣であった山岸（進士）家と互いに姻族関係で結ばれていたと思われる。
- もう一人光秀の妻として、伏屋姫がいる。
- 服部鳥羽守の長女で、美人のほまれ高く16歳で明智光秀に嫁いだ。しかし、伏屋姫は疱瘡にかかって亡くなったと言われている。

- 明智家は、内紛により妻木家と菅沼氏に分かれ、1502年より「明智姓」は空白となっていたと言う。
- 光秀が継室・妻木氏の由緒を持って「明智姓」を名乗り、土岐氏族の名跡を継いだのかもしれない。
- また、妻熙子の父、妻木広忠は光秀の伯父であり、明智光秀が敗れ、近江国坂本城が陥落すると、西教寺で関係者一族の墓を作った後に、墓の前で自害したという。
- そうであれば、元々光秀は妻木氏の一族であったのかもしれない。

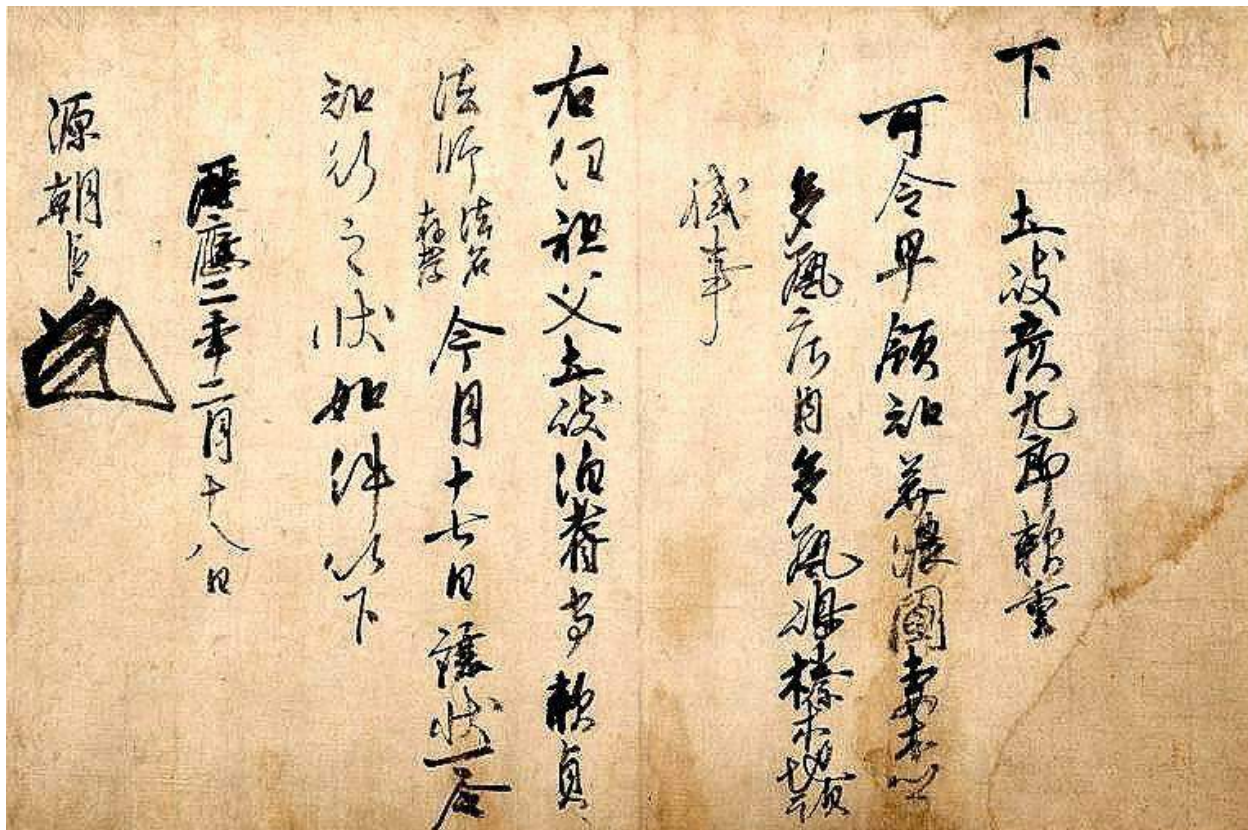


- 妻木氏代々の菩提寺である崇禅寺（岐阜県土岐市）の廟所の扉にも、金に輝く桔梗紋が付け<sup>38</sup>られている。

# 土岐明智氏のルーツは妻木郷だった

- 暦応2年(1339)2月18日に、美濃守護土岐頼貞の所領であった妻木郷と多気庄(大垣市・養老町)の一部を、孫の彦九郎頼重が相続したことを、室町幕府が認めた文書。

これにより頼重を土岐明智氏の初代とする。



# 幼少期の光秀（土岐明智氏）は、 騒乱の真っ只中に居た。

## □応仁の乱後の京都錯乱

- 応仁の乱後、足利将軍と細川家が夫々後継者争いをし、それに三好氏が加わり、日替わりのように支配者が変わる事態となった。

## □応仁の乱後の美濃錯乱

- 守護土岐氏の相続争いに乗じて、守護代斎藤氏や小守護代長井氏が実権を得て抗争を繰り返し、その長井氏や斎藤氏を乗取った道三が、守護土岐氏を追放した。

## □土岐氏は、将軍足利氏により分断され弱体化する。

- 土岐明智氏は、幕府の奉公衆となり、京都在住となった在京宗家明智氏と美濃に残った明智氏とに別れ、妻木郷を乗取った明智氏が妻木氏を名乗る。宗家没落の後、妻木氏が本家となる。
- 光秀の少年期に城主として実在が確認できる明智一族は妻木氏のみである。



# 光秀の従妹 帰蝶(濃姫)とは

- 帰蝶の母・小見の方の兄は明智光秀の父の明智光綱であり、帰蝶は光秀の従妹とされ、天文4年（1535年）に生まれた。
- 1528年生まれの光秀とは7歳違いとなる。
- 帰蝶は天文15年（1546年）12歳で、美濃守護土岐頼純の正室となったとされているが、帰蝶はすでに天文13年（1544年）信長と婚約しており頼純に嫁いだのは妹であるかも。
- 『絵本太閤記』では、**濃姫**として登場しているが、これは美濃からきた姫という意味である。
- 江戸時代に成立した『美濃国諸旧記』では**帰蝶**であったとされ、『武功夜話』では**胡蝶**であったとする。
- 道三の居た鷺山城から1549年、15歳で16歳の信長のもとに嫁いで正室となったので、**鷺山殿**と呼ばれていたとも言われる。
- 信長に嫁いでから後の帰蝶については、記録が残っていない。

# 青年期の履歴その I

- 小和田哲男は、将軍・義輝の近臣の名を記録した『永禄六年諸役人附』に見える足軽衆「明智」を光秀と解し、朝倉義景に仕えるまでの間、足軽大将として義輝に仕えていたとしている。
- 1565年5月 三好三人衆 は、二条城で足利義輝 を殺害する。
- その後、牢人になった光秀は、「朝倉義景」を頼り、その優れた頭脳と鉄砲の腕前を買われ、軍師として仕えたとされる。
- しかし、美濃から逃れた光秀が、朝倉義景を頼る前に朽木谷や京都に居た義輝に足軽として仕えたとするのは無理がある。
- 越前で浪人していた光秀は、朝倉のもとに移ってきた義昭の奉公衆である細川藤孝と意気投合して中間となり、その後、軍功により義昭の足軽となって仕えたのではないか。
- 義輝に仕えていたとすれば、朝倉を頼った後かもしれない。

## 青年期の履歴そのⅡ

- 光秀は美濃国の守護・土岐氏の一族で、土岐頼純に仕えるが、父光綱が道三に殺害され、**叔父の光安と共に道三の傘下に入る。**
- 弘治2年、道三・義龍父子の争い（長良川の戦い）で**義龍に与して道三を下すが、義龍と争いがあり明智城を攻められ、妻の熙子や家族と共に、越前大野を経て越前の称念寺に行く。**
- これは母のお牧の方が、称念寺の末寺である西福庵に縁があったことによる。
- 永禄5年、貧しいながらも門前に寺子屋を開き、夫婦と二人の娘で、仲良く生活していた。（三女ガラシャが生まれたのは永禄6年）
- 称念寺は時宗という宗派で、詩歌に優れた住職が多かった。また「遊行」といって全国を旅する布教が特徴であった。
- やがて称念寺住職の口ぞえで、朝倉家家臣の黒坂備中守に仕える。

## 「明智光秀が朝倉義景に仕えた」という話には根拠がない

- 朝倉家の家臣であれば掲載されているはずの『朝倉義景亭御成記』や『一乗録』に、光秀の名前は載っていない。
- 朝倉義景の家臣の黒坂備中守に明智光秀が仕えていたという話がある。
- その根拠となるのは江戸時代前期の軍学者・儒学者である山鹿素行（1622～1685）の「武家事記」の記載である。
- 「武家事記」には、明智光秀が「朝倉義景家臣黒坂備中守に仕え、その後細川藤孝に仕え、その後足利義昭の奉公衆になった」という記載がある。
- 称念寺門前に住居を構え、黒坂備中守に長く仕えた・・・というのが光秀の知られざる前半生だったのではないかと？

# 『遊行三十一祖京畿御修行記』

- 『遊行三十一祖京畿御修行記』は、時宗総本山遊行寺31世・同念上人の回国修行記（業務日誌）。
- 上人は1月24日、惟任日向守光秀のいる近江坂本へ、六寮（尾張国萱津光明寺の僧・梵阿ぼんあのこと）を派遣した。
- 「同廿四日坂本惟任日向守へ六寮被遣、南都御修行有度之条筒井順慶へ日向守一書可有之旨被申越。惟任方もと**明智十兵衛尉**といひて、濃州土岐一家。牢人たりしか、越前朝倉義景頼被申**長崎称念寺門前に十ヶ年居住**故念珠（ねんごろ）にて、六寮、旧情甚に付て坂本暫留被申。」
- 惟任日向守光秀は、主君のいない浪人になったので、越前国の朝倉義景を頼り、長崎称念寺の門前に10年間住んでいたことで、昔話に花が咲き、六寮は、坂本に暫く留められた。

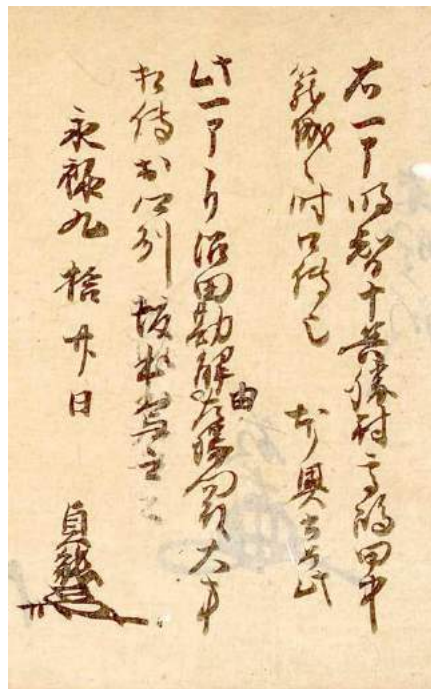
# 「米田文書」 『針薬方しんやくほう』 奥書

明智光秀が1566（永禄9）年より前に、交通・経済の要衝だった近江国の湖西で活動していたことを示す書冊が熊本市の旧家で見つかった。

織田信長に仕える前のもので、光秀に関する史料としては最古。

米田貞能さだよし（足利義輝の幕臣のちに細川藤孝の家臣。義昭を藤孝と共に興福寺から救い出した）が1566年10月、湖西の近江坂本（滋賀県大津市）で書写した。

その奥書 [おくがき] に針薬方の説明として、元々は「明智十兵衛が近江国高嶋郡の田中城（滋賀県高島市）にろう城した時の医薬の秘伝をまとめたもの」と記されていた。



「米田文書」に含まれる『針薬方』は、光秀の史料上の初見である。

- 右一部、**明智十兵衛尉**、高嶋田中籠城の時口伝なり、
- 本の奥書かくのごとし、
- この一部より、沼田勘解由左衛門尉殿大事に相伝し、江州坂本においてこれを写す、
  - 永禄九 拾 廿日 貞能（花押）
- ニギリ下しとめたき時
- 一、ハヅ 一、硫黄
- 一、カンキャウ 一、甘草
- 水にて手を冷やし、甘草を煎じて手を洗うなり、
  
- 「**高嶋田中籠城之時**」は、永禄8年5月9日に室町幕府將軍・足利義輝が暗殺された**直後**であると考えられる。
- 田中城城主の田中氏は、幕府奉公衆に属しており、將軍家は田中城落城を座視できず、奉公衆を派遣して籠城させた。
- **光秀**は細川藤孝の中間として幕府軍に加勢して田中城に籠城し、浅井軍と戦い戦功を上げた。
- 永禄9年義昭が越前国に移った頃には、**光秀は湖西地域に拠点**を持ち、**幕臣**である藤孝、**貞能**そして義昭と**関係**をつくっていたと考えられる。

# 「高嶋田中籠城之時」とは

- 浅井長政が高嶋郡の土豪饗庭あいは氏を中心とする三坊を味方に付けて幕府御家人朽木氏・田中氏の所領押領を図った。
- 長政が西林坊・定林坊・宝光坊の忠節を褒め知行を宛がう旨の永禄九年4月18日付の書状がある。『浅井氏三代文書集』
- それに対して、光秀が小和近江高嶋で饗庭三坊と呼ばれる西林坊・定林坊・宝光坊の城下に放火し、敵城三か所を落としたこと、林方よりの注進を義昭へ披露するように、依頼した書状がある。
- 光秀は、永禄九年には間違いなく足利義昭の軍勢の一員として近江にいたのだ。

## 明智光秀書状写

高嶋の儀、饗庭三坊の城下まで放火せしめ、敵城三か所落城したので今日は帰陣しました。然るところ、林方より只今この如くの注進がありましたので、然るべく御披露肝要です。事態に変化があれば追々報告いたします。

明智十兵衛尉

光秀（花押影）

五月十九日

曾我兵庫頭殿

御宿所



# 光秀は、室町幕府の奉公衆であったか？

- 光秀が、**室町幕府の足輕衆**として仕えていたという記録は、「光源院殿御代当参衆并足輕以下衆覚」通称『**永禄六年諸役人附**』という室町幕府の**役職名簿**に残っている。
- しかし、前半にある「足利義輝」時代のものには登場せず、後半の「足利義昭」時代のものに「足輕衆」として「明智」という姓だけが登場する。
- もしかすると、朝倉を頼って越前に逃れてきた光秀は、朽木谷に逃れて居た足利義輝に、ある時期から仕えていたのではないだろうか。（朽木谷は越前から若狭を挟んで近い）
- その後、永禄元年に上洛した義輝とも、光秀は細川藤孝を通じて主従関係は続いていたのかもしれない。
- 最初は細川藤孝の中間であり役職名簿には載らず、その後足利義昭に仕えて足輕となったのではないか。

# 足利将軍

- 足利家は「権威」はあったが、直属の軍隊と領地を僅かしか持っていなかった。
- 足利義輝は近江の「京極家」に厄介になりながら、「細川家」や「六角家」に協力を依頼しその軍勢を借りて、京都を支配していた「三好家」と戦うが、細川家は三好家に破れて没落する。
- その後も三好家と敵対しつつ、近江坂本から京都へ帰還する機会を伺い続け、永禄元年 三好政権打倒のため朽木谷で挙兵する。
- その後、三好家は方針を転換して足利家との講和を提案。
- 義輝は六角義賢の仲介により、長慶との間に和議が成立、5年ぶりの入洛が実現。
- 永禄元年に京都に帰還し、ようやく「将軍職」としての立場を取り戻す事になった。

# 将軍として京都に復帰した 足利義輝

- しかし京都を中心とした近畿の権力は、相変わらず三好家が握っており、足利家は、まだ「**権威があるだけの飾り**」に過ぎなかった。
- **足利義輝の望み**は「**室町将軍家の権力復興**」であった。
- 三好長慶の死と三好家の弱体化は、足利義輝にとってもチャンスとなった。
- 彼はいよいよ足利家の権力を復興させようと行動を開始、**松永久秀**を含む**三好家の家老**を京都から追放し、足利将軍家の独立を狙う。
- しかし、永禄8年**松永久秀**は三好家の家老「**三好三人衆**」と策謀を巡らし、足利義輝の親類である「**足利義栄**」を新たな**将軍**に擁立して、邪魔になった足利義輝を亡き者にしようと「**二条城**」を襲撃し、**足利義輝**を暗殺した。

# 奉公衆とは

- 奉公衆は武官官僚とも呼ぶべき存在であり、守護大名にではなく将軍そのものに仕えた。恒常的に京都に滞在した奉公衆(在京奉公衆)の他に、将軍の御料地を管理する在郷奉公衆もいた。
- 足利義満は、強力な軍事力と経済力を持つ土岐氏を牽制する為、土岐氏の乱を誘発すると共に、国内に分布した土岐氏一族および有力国人を奉公衆に吸収し、土岐氏の強大化を防いだ。
- 石谷、多治見、揖斐、明智氏などの土岐氏一族をはじめ、東濃の遠山氏、郡上の東氏、西濃の宇都宮氏、山県郡の山県氏、武儀郡の佐竹氏などが奉公衆に編成された。
- 永禄の乱の際には「奉公衆数多討死云々」と「言継卿記」に記されている。
- 永禄の乱を生き残った奉公衆の細川藤孝は、行灯の油代にも事欠くほど困窮していたと言われる。
- その頃、光秀は藤孝の中間だったとの説もある。

# 「光源院殿御代当参衆并足輕以下衆覚」

足利義輝

明智。  
珍藏主。  
藥師寺。  
丹彦十郎。  
内山彌五太兵衛尉。  
澤村。  
一卜軒。  
山口勘助。  
三上。  
移飯。  
野村越中守。  
長井兵部少輔。  
柳澤。  
森坊。

永祿六年 諸役人附  
光源院殿御代當參衆並  
足輕以下衆覺。  
御供衆。  
永祿六年五月日  
大館陸奥守晴光。  
同十郎輝光。  
細川中務大輔輝經。  
大館伊豫守晴忠。  
仁木七郎。  
一色式部少輔藤長。  
細川兵部大輔藤孝。  
上野孫三郎。  
一色兵部大輔輝清。  
高山尉松。  
伊勢因幡入道心榮。  
同七郎左衛門尉貞知。

義昭の代  
義昭が越前にいた頃  
京都から付いてきたものと  
新規に雇ったもの

義輝の代  
京都時代の幕臣  
永祿8年に多数が死亡

# 光秀の前半生は卑賤視されている

悪行は身分に転嫁する？

- 「惟任日向守は十二日勝竜寺より 逃のがれテ、山階にて一揆にたたき殺され、首も骸も京へ引かれ云々、浅まし、細川兵部太夫が中間にてありしをこれ引立て、中國の名誉に信長厚恩にてこれを召し遣わされ、大恩を忘れ至る曲事、天命かくのごとし」

『多門院日記』天正10年6月17日

- 宣教師ルイス・フロイスは、「明智光秀はもとより高貴の出ではなく、信長の治世の初期には、公方様の邸の一貴人、兵部大夫（細川藤孝）と称する人に奉仕していたのであるが」と書いている。
- 江村専斎の「老人雑話」では「明智光秀は細川藤孝の家来だった」「校合雑記」では「明智光秀はもと細川藤孝の徒のもの」とある。
- また、「耶蘇会日本年報」でも、「光秀はいやしい歩卒であった」との記述がある。

- 「**靱井家日記**」には「**明智十兵衛**という**族姓も知らぬもの**を惟任日向守と名乗らせ」と書いてある。
- 光秀は、山崎の戦いの直後から**光秀=謀反人=悪逆人**として**卑賤視**されていたのだろうか。
- それとも？
- 明智光秀が天正9年6月1日に作成した御霊神社所蔵の「**明智光秀家中軍法**」という史料がある。
- その添書に「既に**瓦礫沈淪**がれきちんりんの**輩**を召し出され、**あまつさえ莫大な人数を預け下さる**以上は」という一文がある。  
光秀自ら**瓦礫沈淪の輩**と卑下している。
- 少なくとも光秀が苦しい前半生を送っていたことは間違いなかったと考えられるが、何らかの契機に義昭そして信長に仕官することによって、この段階で大きく出世を遂げたのだろう。

# 光秀、義昭と信長の仲介者となる

- 三好らは、義輝の弟・覚慶かくけい(28)を興福寺に幽閉したが、細川藤孝らの助けにより覚慶は興福寺を脱出、伊賀、甲賀そして野津郡矢島へと逃れて還俗して足利義昭となり、若狭の武田氏へと移り更に越前の朝倉氏のもとへ逃れる。
- 永禄11年2月8日 三好三人衆に担がれた足利義栄が朝廷から將軍宣下を受け14代將軍となる。

そこで義昭は永禄11年6月23日信長に対し、上洛して自分を征夷大將軍につけるよう、光秀を通じて要請した。

『細川家記(綿考輯録)』

- 信長への仲介者として光秀が『細川家記』に初めて登場する。
- しかし、『信長公記』や『明智軍記』には、光秀が上洛の仲介をしたとは一言も書かれてない。
- 義昭上洛前後の光秀については、『細川家記』と『信長公記』そして『明智軍記』の記載に大きな差異があり注意を要する。



- その後、光秀は義昭と信長の両属の家臣となり、永禄11年（1568年）9月26日の義昭の上洛に加わる。『細川家記』
- 信長への仕官の初祿は『細川家記』では500貫文で朝倉家と同額としており、これは雑兵ら約百人を率いて馬に乗り10騎位で闘う騎馬（うまのり）の身分であり、通説となってきた。
- この時の500貫は5千万円から7千5百万円でありかなりの高給だ。
- しかし、太田牛一の『太田牛一旧記』では、朝倉家で「奉公候ても無別条一僕の身上にて」と、特色の無い部下のいない従者1人だけの家臣だと記述している。
- 織田信長と足利義昭を”美濃の立政寺”で対面させた永禄11年7月27日、光秀は私兵500余名を率いて足利義昭を先導した。

と『細川家記』には書かれているが？

## 『明智軍記』には、全く異なる光秀像が描かれている

- 信長から再三、光秀に招きがあった。
- 光秀は信長の徳の輝きを見て承知し、朝倉義景に暇を申し上げ、永禄9年10月9日、越前から美濃岐阜へ参上した。そのころ、光秀は39歳であった。
- すぐに猪子兵助を通じて、信長にお目見えした。
- その時、持参してきた祝儀として、菊酒の樽五荷、鮭の塩引の簀巻き二十を献上した。
- また、信長の奥方(濃姫)は、光秀のいとこなので、特に奥方への土産として、越前大滝のもとゆい紙三十帖、文箱・香炉箱など五十を献上した。
- 信長は、光秀の知恵がよく回る振舞を見て、美濃安8郡に4200貫の關所があったので、光秀に与えた。 『明智軍記』 卷二 概略
- しかし、永禄10年の稲葉山城の戦いにも光秀の姿は見えない。

## 明智軍記にも、 明智は、義昭と信長との仲介者として出てこない

- 「それならば、まずは**使者**を送って、信長の心底を聞きたい」と義昭は仰せになり、**上野清信・細川藤孝**を岐阜へ派遣しました。
- 信長は「かたじけなくも君命をこうむったことは、私にとってこれ以上の面目はありません」と申されました。
- **上野・細川**の二人の使者は、越前に帰ってこのことを申し上げたところ、**義昭**は非常に喜んで、永禄11年7月18日、**一乗谷**をご**出発**しました。
- **朝倉義景**から路次の警固として、**前波景貞**が**五百騎**でお供して、敦賀津にお着きになりました。
- 岐阜の**信長**から**案内者**として、**不破光治・村井貞勝**が派遣されてきたので、朝倉家の警固は小谷から帰りました。
- **浅井長政**は関ヶ原の宿まで、義昭をお送りしました。

# 織田信長と義昭は、上洛以前から面識が有った

- 「細川藤孝宛て信長文書」には、尾張時代の信長が足利義昭の上洛要請を受諾という書状がある。（永禄八年1565年12月5日）
- 更に、永禄9年にも、2人が京に上る計画を進めていたことを示す書状が見つかった。
- 書状は永禄9年8月28日付で計14通。
- 近江矢島（現在の守山市）に亡命していた義昭が山城南部や伊賀の武士に支援を要請する内容で、「上洛のお供として信長の参陣が決まった」と明記されている。
- この翌日に近江の戦国大名・六角氏の離反が発覚。上洛計画は頓挫したという。
- この書状は、義昭・信長上洛の2年前に織田信長が足利義昭の要請に応じて上洛する計画だったことを実証するものである。
- これらの文書に拠れば、信長は光秀の仲介を得ずとも、既に義昭とは共に上洛を計画する仲だったと思われる。

# 光秀、歴史史料上に初登場

- 明智光秀という人物の名が明確に登場するのは、永禄11年11月14日付『山城上賀茂惣中宛 村井貞勝・明智光秀連署状』となる。
- 織田家吏寮で「信長」から京都所司代を命じられている村井貞勝と「幕府」の行政の代表として明智光秀が連署している。
- これは織田信長の上洛後、室町幕府の行政組織がやっていた仕事の織田政府への引継ぎだと考えられる。
- つまり、明智光秀が、幕府の行政面を取り仕切る”奉行職”をやっていた室町幕府の有力役人であったことが分かる。
- 信長の上洛前後には、光秀は幕府の奉行衆に出世していたのではないだろうか。

# 山城上賀茂惣中宛村井貞勝・明智光秀連署状写

当所寺社領之事、如有来、無異義被仰付候、被得其意、可有全領知事  
尤候、然者、各被相談、急与罷出、御礼可被申上候、為其如此候、恐々  
謹言、

霜月十四日

明智光秀 在判

村井貞勝 同

上賀茂惣御中

## 概訳

当寺社領の事、従来通り問題なく安堵されるので、朱印状が出る前に、  
急ぎ信長公のところへ出頭して、御礼を申し上げよ。

永禄11年(1568年)11月14日

明智光秀・村井貞勝

上賀茂惣中殿

# 『信長公記』への初登場 歴史の表舞台に躍り出た光秀

- 永禄12年（1569年）1月5日、三好三人衆が義昭宿所の本圀寺を急襲した。防戦する義昭側に光秀もおり、『信長公記』へ初登場する。
- 細川藤賢・織田左近・野村越中・赤座永兼・赤座助六・津田左馬丞・渡辺勝左衛門・坂井与右衛門・明智光秀と記載。
- 1月14日、信長は義昭に『殿中御掟』を示し、義昭に承諾させる。
- 義昭にとって屈辱的内容だったが、これを拒絶する事は出来なかった。
- 義昭は将軍であっても、領地さえ持っては居なかった。
- 「公儀に対し奉り、忠節の輩に、御恩賞・御褒美を加えられたく候と雖も、領中等之なきに於ては、信長分領の内を以ても、上意次第に申し付くべきの事」  
殿中御掟追加5か条

(将軍家に対して忠節を尽くした者に恩賞等与える時は、将軍には領地が無いのだから、信長の領地の中から都合を付ける事)

- 明智光秀は、永禄13年、義昭から初めて所領を与えられる。山城国下久世荘(現向日市)60石 300万円/年 中小官僚の封禄
- しかし、東寺の寺領を勝手に与えたので東寺から幕府に訴えられて信長が朱印状を出している。
- 同年4月頃から木下秀吉、丹羽長秀、中川重政と共に織田信長支配下の京都と周辺の政務に当たり、事実上の京都奉行の職務を行う。
- 明智光秀が一次史料（同時代史料）に初めて登場するのは、同年4月14日付の山城国賀茂荘に宛てて、400石の納入と軍役を命じる連署奉書である
- 秀吉が日付の下に署名しており、光秀がその後に署名している。
- またその4日後には、光秀、秀吉に丹羽長秀、中川重政を加えた4人連署で文書を発給しており、当時、これら4人が京都や畿内の政務を担当する「京都奉行」であったことがわかる。



# 光秀破格の出世

- 光秀は、この頃には、義昭の足輕から奉行にまで抜擢されていたと見られる。
- 義昭と信長に両属していたと言われるが、この段階では義昭の幕臣として、信長の家臣と共に奉行を務めていたと思われる。
- **元亀元年**（1570年）4月28日、光秀は**金ヶ崎の戦い**で信長が浅井長政の裏切りで撤退する際に、池田勝正隊3,000を主力に、秀吉と共に殿を務め防戦に成功する。
- 元亀元年9月には、三好三人衆の四国からの攻め上りと同時に石山本願寺が挙兵すると、**光秀は信長と義昭に従軍**して摂津国に出陣した。
- 信長の留守を突いて志賀の乱が起こる。
- 志賀の乱の後、浅井長政、朝倉義景の京都侵攻の際の後処理として、宇佐山城の守備を任される。

# 坂本城築城

- 光秀は、**元亀2年**9月12日の**比叡山焼き討ち**で武功を上げる。
- 叡山焼き打ち前、「是非ともなでぎりに仕るべく候」と皆殺しを命じており、叡山焼き打ちの中心的な実行者だと思われる。
- 信長公記に「志賀郡を十兵衛に下さる」と記載がある。光秀はこの頃、義昭から離れて信長の家臣となったのか。
- 報奨として、近江国の滋賀郡（**志賀郡:約5万石**）を与えられた光秀は、間もなく**坂本城の築城**にとりかかる。
- 坂本城は、安土城に先駆けて**天守**が築かれ、**瓦**が用いられた城だった。
- また『兼見卿記』元亀3年12月22日の記述によると、
- 坂本城には天守があり、作事が行われ元亀3年12月頃には天守がかなり進捗していたようだ。

# 光秀、足利義昭と袂を別つ

- 元亀4年（1573年）2月、義昭が挙兵。
- 光秀は石山城、今堅田城の戦いに義昭と袂を別って信長の直臣として参戦した。
- 同年7月にまたも義昭が槇島城で挙兵し、光秀も信長軍として従軍した。義昭は降伏後に毛利氏を頼って亡命し、室町幕府は事実上滅亡したとされる。
- しかし、室町幕府の統治機構はそのまま残されており、足利義昭は、信長の死後もなお、天正16年正月まで、鞆に御所を設け毛利輝元を副将軍に任命し将軍であり続けた。(鞆幕府)
- 鞆の浦の義昭のもとに亡命したのは、北畠具親（伊勢国司家）・武田信景（若狭守護家）・六角義治（近江守護家）などの、室町時代以来の国司・守護・守護代に連なる人々とその一族であった。
- この頃、細川藤孝は義昭を見限り信長に仕えたとみられる。

# 光秀の誕生から死亡まで略歴 (享年55歳とした場合)

- 1528年 大永8年 光秀誕生 蜂須賀正勝は1526年、斎藤義龍は1527年生
- 1545年 天文14年 妻木熙子と結婚 18歳
- 1556年 弘治2年 斎藤道三が義龍に殺され明智城脱出 29歳
- 1565年 永禄8年 足利義輝 暗殺される 38歳 細川藤孝中間
- 1566年 永禄9年 田中城籠城 39歳
- 1568年 永禄11年9月 義昭の上洛に加わる 41歳 足利義昭幕臣
- 1568年 永禄11年11月 明智光秀連署状 奉行職
- 1569年 永禄12年 三好三人衆 六条本圀寺攻め 42歳

---

- 1570年 元亀元年 金ヶ崎の戦いで殿を務める 43歳
- 1571年 元亀2年 比叡山焼き討ち 44歳 信長家臣
- 1573年 元亀4年 足利義昭追放 46歳
- 1575年 天正3年 惟任日向守を賜る 48歳
- 1580年 天正8年 丹波一国 (約29万石) を加増 計34万石を領する。 53歳
- 1581年 天正9年 京での御馬揃え 54歳
- 1582年 天正10年 本能寺の変 死亡 55歳

# 光秀、丹波国・丹後国を平定

- 明智光秀は、**天正3年**に、惟任（これとう）の賜姓と、従五位下日向守に任官を受け、**惟任日向守**となる。
- **天正7年**、丹波攻めは最終段階に入り、八上城、黒井城を落とし、ついに**丹波国を平定**。
- さらに、すぐ**細川藤孝**と協力して**丹後国も平定**した。
- 信長は感状を出し褒め称え、この功績で、**天正8年**に**丹波一国（約29万石）を加増**され計**34万石**を領する。
- 黒井城を増築して家老の斎藤利三を入れ、福智山城には明智秀満を入れた。
- また丹波一国拝領と同時に丹後国の**長岡（細川）藤孝**、大和国の**筒井順慶**等の近畿地方の織田大名が**光秀の寄騎**として配属される。

# 信長方面軍を編成する

- 信長は、勢力拡大に伴って四方の敵と隣接すると、万単位の兵を持つ軍団を有力家臣に与えてこれを指揮させた。方面軍編成の目的は、天下統一に向けた**各方面の制圧**である。

- 美濃・尾張・飛騨方面 織田信忠・斎藤利治・姉小路頼綱
- 対武田方面 滝川一益・織田信忠（天正元年）
- 对本願寺方面 佐久間信盛（天正4年 - 天正8年）
- 北陸方面 柴田勝家（天正4年）
- 近畿方面 明智光秀（天正8年）
- 山陰・山陽方面 羽柴秀吉（天正8年）
- 関東方面 滝川一益軍団（天正10年）
- 四国方面 織田信孝軍団（天正10年）
- 東海道の抑え 徳川家康
- 伊勢・伊賀方面 織田信雄・織田信包

# 信長、光秀にとっての天正8年

- 天正8年は、本願寺が降伏し、信長にとって天下統一事業が新たな段階に入り、統一権力の体裁を整えた年である。
- 光秀にとっては、信長から近江坂本に加えて、新たに丹波国を拝領して国持大名になり「近畿管領」と呼ばれるという栄進を遂げた年である。
- 「丹波国日向守働き、天下の面目をほどこし候」(信長折檻状)
- 信長、光秀共に最良と言える年であった。
- この年を頂点として、翌9年から二人の関係の底流に不協和音が響き始める。

# 「御馬揃え」 戦国の世の終わりを告げる？

- **天正9年** 正月15日に安土城下で行われる**左義長**（新年の火祭り行事）に、「爆竹を打ち鳴らしながら**騎馬行進**を行い、思い思いの出で立ちで参加する」よう触れを出した。
- 当日は信長自身も奇抜な装束で祭りに臨み、たいそう評判になった。
- 信長は**京**でも**大規模な馬揃え**をするよう指示し、**明智光秀**は奉行を務める。
- 天正9年2月28日 京での御馬揃えは正親町天皇も臨席のうえ盛大に行われ、光秀はその手腕を存分に発揮し、家臣団で最も**重要なポスト**へと駆け上がっていった。



# 『明智家法』 後書き

- 天正9年(1581年)年6月2日光秀が家法として定めた『明智家法』後書きに信長への感謝の文を書いた。
- 「瓦礫のように落ちぶれ果てていた自分を召しだしそのうえ莫大な人数を預けられた。」
- 「一族家臣は子孫に至るまで信長様への御奉公を忘れてはならない」

# 信長、光秀 蜜月の関係から

## 光秀が一転殺意を抱くまで

「丹波国平定における光秀の働きは、織田家の面目を天下にほどこすものであった。それに続くのが羽柴秀吉で、功績は数カ国に比類がない」

つまり光秀の働きは天下に誇るべきもの、秀吉の働きは数カ国一のもの、後に天下人となる秀吉を上回る評価を光秀に与えている

# 織田政権の崩壊の予感

- 濃尾から近江にかけて領国支配を拡大した**信長**も、伝統的に寺社・荘園の勢力が強い**畿内の支配は十分でなかった**。
- また、**幕府の奉公衆、奉行人層の潜在力**は、侮り難いものを持っていた。
- 信長が、これらの階層を完全に掌握するためには、なお相当の時間を要した。
- この様な在地構造を持つ畿内を、自己の権力基盤に出来なかったところに織田政権が自滅する要因が潜んでいたと言える。
- 「信長の代5年3年は持つであろう。明年あたりは公家になるのではないかと思われる。そうなった後、**高ころびあおのけになって転ぶ**だろう。」

『吉川元春宛 **安国寺恵瓊書状**』

# 光秀の妹(義妹)は、信長の愛妾?だった

- 御ツマキは光秀の正室・熙子の妹・芳子?(八重)
- 天正4年、光秀の妻熙子の死後、光秀の面倒を見ていたとも言われている。
- 御ツマキは、兼見卿記、言経(ときつね)卿記等に、公家と光秀そして信長の調整役として何度も登場している。
- 御ツマキは、天正5(1577)年11月、興福寺と東大寺との間の相論に織田方の交渉窓口として史料に初めて登場する。
- 言経卿記には、織田信長が京に上洛した際に、1580年5月、山科言経が進物を献上すると、その近所女房衆である「ツマキ」らにも帯を献上したとある。
- 「御ツマキ」は、明智光秀と織田信長の間を取り持っていたとも考えられ、2人の間柄を調整するような、重要な役割を担っていたとも推測される。

# 御ツマキ死亡

- 天正9年（1581年）8月、「去七日・八日ノ比歟、惟任ノ妹ノ御ツマキ死了、信長一段ノキヨシ(気好)也、向州(光秀)無比類力落也」。  
（多聞院日記）
- 光秀の妹の御ツマキが死んで、光秀が非常に気落ちしたと書いてある。
- 信長お気に入りのツマキの死去で光秀の孤立化が進み、本能寺の変の遠因となったとも言われている。

一、則御乳人へ惟任妹御ツマ木殿ヲ以テ被仰出趣者、此申事近年ノ有姿ニ被申付ヘシト内符サマ御意也、依之惟任へ御チノ人被仰候て、此趣以藤田伝五、筒順へ申付ラル、也、証文ノ写ハエテ被遣了、同我免除事モ伝五請取テ惟任へ可被仰由也、廿三日ノ事也、被仰出ハ廿二日ノ事也、

# 光秀、絶頂期からの転落

- 天正9年2月に、信長は京都で大規模な馬揃え（軍事パレード）を行なうが、この責任者として指名されたのが光秀であった。
  - 大軍を差配できる立場に立った光秀は、得意の絶頂だったはずである。
  - しかしその後の四国政策の転換や、秀吉の中国攻めへの与力としての援軍命令は、一度は「秀吉に勝った」と思っていた光秀に、深い失望感を味わわせることになった。
  - これが謀反の1つの引き金になったとする見方がある。
  - 更に、自らが老齢に達していることを感じ、我が子光慶と明智家の将来を不安に感じていたのかもしれない。
- 果たして、本能寺の変は何故起こったのか？

# 本能寺の変前夜

- 1 柴田勝家らは北陸遠征中
- 2 滝川一益は関東へ
- 3 織田信孝と丹羽長秀は四国への渡海準備
- 4 羽柴秀吉は高松城を水攻め
- 5 信長は九州平定まで視野に入れ、毛利攻めの支度を開始
- 6 毛利攻めの先陣として、明智光秀・細川忠興、池田恒興・高山右近・中川清秀らに出陣の準備命令
- 7 徳川家康は穴山梅雪と共に安土城を訪問の後堺見物

- **信長**は博多の豪商・島井宗室を正客に、本能寺で自慢の38種もの名物茶道具を披露した茶会を終えて、**僅かな手勢**とともに**本能寺**に滞在していた。
- 一方の**光秀**は、羽柴秀吉の援軍を命じられて、およそ1万3千の兵とともに京都にほど近い亀山城にいた。
- 羽柴秀吉、柴田勝家、丹羽長秀、滝川一益などの**織田重臣**たちは、各々、京都から遠く離れた**前線に張り付**いている。
- **徳川家康**は同年3月の武田討伐を労う饗応で、安土へ招かれた後、わずかな近臣と**堺見物**を終えて**京都**へ向かう直前。
- **織田信忠**は、家康より先に堺から帰り、数百の手勢とともに**京都**に**滞在**していた。
- 光秀にとって、これは、**信長、信忠**父子そして**家康**を一挙に討ち取る**絶好のチャンス**といってもいい。



# 光秀、謀反の決意

- 天正10年6月1日、申の刻（午後3時から5時ごろ）、居城である丹波・亀山城にいた明智光秀は家臣たちに出陣を命じる。
- 午後8時ごろ、はじめて重臣たちに重大な決意を告げる光秀。
- 重臣たちは驚愕するが、しかし光秀の想いを汲み覚悟を固めた。
- 明けて6月2日未明、「本能寺の変」の幕が切って落とされる。
  
- いったいなぜ、光秀は織田信長の誅滅を断行したのか。日本の歴史を大きく変えたこの事件は、いまだに**日本史における最大の謎の1つ**であり続けている。

## 参考資料

- 多聞院日記
- 昔阿波物語
- 三好記
- 細川記
- 元親記
- 明智軍記
- 言繼卿記 山科言繼
- 信長公記
- 正親町天皇紀 編年資料 天正十年
- フロイス日本史 ルイス・フロイス著
- 石谷家文書 将軍側近のみた戦国乱世
- 戦国の活力 8 山田邦明
- 本能寺の変の再検証 熊田千尋
- 織田・徳川同盟と王権
- 織田政権の成立と崩壊
- 本能寺の変431年目の真実
- 夏草の賦
- 誰が信長を殺したのか
- 明智光秀と本能寺の変
- 明智光秀—謀叛にあらざ—
- 信長殺し、光秀ではない
- 謎とき本能寺の変
- 信長燃ゆ
- 検証本能寺の変
- 謎解き本能寺の変
- 決戦本能寺
- 光秀からの遺言
- 小林正信著
- 小林正信著
- 明智憲三郎著
- 司馬遼太郎著
- 桐野作人著
- 小和田哲男著
- 大栗丹後著
- 八切止夫著
- 藤田達生
- 安部龍太郎
- 谷口克広著
- 藤田達生著
- 葉室麟他著
- 明智憲三郎著